白梅学園大学・短期大学図書館報

花みづき

第24号／2010.4.1
白梅学園大学・短期大学図書館
小平市小川町1-830 TEL042-346-5626

アメリカの図書館との出会い

子ども学部 家族・地域支援学科長　草野 篤子

最近、世代間交流に関連した国際会議に出ることが多くなり、各国の研究者や実践家と話し合う機会が増えてきました。まず、世代間交流に関連して言えば、国際学術誌Journal of Intergenerational Relationshipsが、Taylor &Francis GroupのRoutledgeから、季刊で発行されています。また、世界各国での世代間交流に関心を持つ個人や団体が連携する国際世代間交流プログラム・コンソーシアム（ICIP）も、1999年10月にオランダのファールスで、第1回世界会議を開催しており、この4月末には、第4回世界会議がシンガポールで開催されます。

1979年から1981年まで、米国のカトリック大学大学院、スタンフォード大学大学院に留学した折、米国の大学図書館、市立図書館の充実ぶりに出会い、大変驚かされました。東海岸では、メリーランド州のベセスダ市の図書館に、子どもたちとよく通いました。きれいな深海のコバルトブルーの絨毯が敷かれ、子どもたちがその上で自由な姿勢で本を読んでいる子ども図書室、貸し出し図書数の制限が全くないことなど、日本では、一度に3冊程度しか借りられなかった当時の日本からきた留学生にとっては、全く目から鱗といった印象でした。

スタンフォード大学

スタンフォード大学の図書館は、大学学部生用の図書館と大学院生用のグリーン・ライブラリーがあり、開館時間は24時間で、夜中の0時でも同じゼミを取っていた大学院の友達の多くが図書館で勉強していたのが、つい昨日のことのように思い出されます。この2つの図書館の他に、フーバー研究所があり、当時、戦争と平和に関連する資料が全米でも第一位にあたる蔵書数を誇り、有名な名誉教授が図書・資料の紹介や、学生の研究指導にボランティアとして、図書相談席に座っておられたのにも、びっくりしました。

スタンフォード大学グリーンライブラリー

また、同じ図書が、何十冊もあることに驚いたことがありました。基本的な必須図書を、登録学生の数だけ書架に備えているのでした。病気などで授業に出られなかった時用に、学生アルバイトが作成したわかりやすい授業ノートの貸し出しを受けることが出来、障がい者のためのノートもありました。

カリフォルニアに住んでいる友人の母親は、すでに85歳を超えていますが、ここ25年間、市立図書館の図書ボランティアをやっていて、毎週木曜日の午後には、自分で車を運転して近くの図書館に通い、旧知の友達と本の修理や、新刊図書の整理などを、今でもしています。新刊図書を直接手にすることも出来るし、親しい友達に会い話をも出来るし、この図書館ボランティアは、生き甲斐になっているようです。

また、大学図書館から、かなりの金額の請求書が送られてきたことがありました。夏休み前に、返却した図書をまだ返却していないという間違った請求書でしたが、返却日を超えるとしっかり罰金がかかるという米国の経済合理性に触れ、これまた、目から鱗の体験でした。

1960年代の終わりに、最初の修士論文を書いていた時、フランスの国会図書館に仏文資料を請求した折、5月危機が起り、資料が届いたのは8ヶ月後の晩秋でした。冬には、修士論文を提出しなければならず、とても焦って、米国ワシントンD.C.の国立国会図書館に資料請求をしました。米国の図書館には、図書請求を受けたとき、1週間以内に回答を送るという規則があって、すぐに返事が来ました。回答には、私が請求した仏文資料はないが、同内容の英文資料ならあるということで、私は米国の図書館システムに助けられ、無事、その英文資料を使って、1月までに修士論文を完成・提出することができました。

日本でも、幼児・小学生のレベルから、家庭でも学校でも、もっともっと図書に親しむ生活習慣やシステムが出来上がってほしいと思います。米国、ドイツ、スウェーデンなどでも、車中でみかける大学生や若者が、300頁から400頁ものボリュームのある図書をしっかりと読んでいる姿に出会う一方で、日本の青年が漫画本を携えている光景は、われわれ親世代の子育てや教育責任を感じざるを得ません。

本の外延（エクステンション）

子ども学部 子ども学科 教授　久保木　寿子

一冊の本も、ある企画意図のもとに他の本と共に展示されるときには、他に触発されるかのように、また別の表情を見せるようです。展観のおもしろさはその辺りにあろうかと思います。私がここ数ヶ月の間に目にした、二つの展観について紹介してみましょう。

暮れの19日、「行かずばなるまい」と出かけたのが「冷泉家王朝の和歌守展」でした。私の専門分野は、本学にとっては何とも異色な平安時代の和歌文学なので、藤原定家（1162～1241）の孫為相（ためすけ）から始まる冷泉家の書籍には、常日頃お世話になっているわけです。今回の展観は、長くその文庫に収蔵されていた歌書が写真複製され、時雨亭（しぐれてい）叢書84巻として完結した記念に開催されたもので、都の美術館は、定年後と思しき人たちでかなり混み合っていました。

藤原俊成（定家の父）自筆『古来風体（ふうてい）抄』、『明月記』と呼ぶ定家自筆の膨大な日記（といっても巻物）や『後撰集天福二年本』など、これぞお宝といった国宝・重要文化財のオンパレードでまさに壮観でした。私のお目当ては私家集（しかしゅう）（個人歌集）で、定家自筆「集目録」を確認後、三十六歌仙を始めとする諸歌人の意匠を凝らした膨大な歌集を見て回りました。今年度、某大学院で『主殿集（とのもしゅう）』という歌集を複製本で読んだのですが、その原本が、多くの蒐集品の中の一つとして、枝折梅花の可愛らしい模様の表紙ながら、両下隅がすり切れた形で健気に並んでいました。何せ八百年も前の物です。複製本によれば中まで損傷が及んで読めない所があるのですが、手にとって見られないのが残念。書籍の展観の弱点ですね。

優雅な料紙と墨痕に歌の意味が重なって醸される何とも贅沢な融合美の世界と、それらを膨大なままに守り今に伝えた「家」の意志を思いつつ、満ち足りた思いで外に出ました。

さて、白梅のごく近くに国文学研究資料館という大学共同研究施設があります。平成20年3月、品川区から立川市に移転してきたもので、青梅街道から昭和記念公園方向に左折し程なくの所です。一日がかりの遠出を強いられていたのが今は車で20分。何という幸運！諸文庫の貴重本のマイクロフィルムが所蔵され、紀要や雑誌論文などもほぼ揃います。ここでは大学院生やら研究者が黙々と資料に向き合っています。

資料館に隣接する展示室で、つい先日「江戸の歌仙絵 ―絵本に見る王朝美の変容と創意―」と題する展観があり、光悦三十六歌仙絵（スミソニアン・フリーア美術館蔵）や各種百人一首絵が公開されていました。歌人の姿絵と歌の融合ですが、平安王朝の歌仙たちも江戸期に至ると職人や歌舞伎役者、花魁（おいらん）などに取って代わられ、ついには狂歌が配されるなど、自由闊達なパロディ化からは江戸の息吹そのものが伝わってきます。先に「文学」の授業で百人一首（定家の選）に触れた時、「千早ぶる」「崇徳院」を持ち出した落語好きの学生がいましたが、カルタとして江戸庶民に普及した背景を知るには打って付けの企画でした。他に人影もなく「勿体ない」状態で至福の時を過ごしたことでした。

資料館入館には登録が必要ですが、展示室の方は誰でも無料で入れます。（因みに資料館の反対側になぜか極地研究所があり、ペンギンの剥製や南極に落ちていた巨大隕石、最新の越冬服などが陳列されています）。

期せずして二つの展観から、貴族文化の精髄および保守への意志と、それを変容させずにはおかない時代の意志を連続的に辿ることになりました。本も外延を意識して見ると、何倍もおもしろくなるようです。

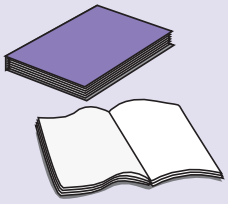
本中毒。

発達臨床学科　2年　鈴木　優希菜

2010年。今年は「国民読書年」らしい。でもそんなものは、全然私に関係ないのです。だって昔から、毎日のように本に触れて活字を取りこんでいるんですもん。

気がつけば私の周りにはたくさんの本がありました。父も母も、本を読まない人なのになぜか。幼い頃は絵本を、年齢が上がるにつれて、多ジャンルの本を読むようになっていました。呼吸するように、当たり前に本が傍にあるという環境が、いつの間にか出来上がっていました。読めば読むほど、本の世界にのめりこんでおりました。

本は良い。素敵です。本当に、活字に埋もれて死ねたら本望、なくらいに。本があれば一通りの精神的活動（勉強も含めた学びも、共感や反発も、自分の道しるべを探すことも、果ては現実逃避まで）が不自由なく出来ますし、人間のお友達と喧嘩することはあれど、本は決して裏切りを起こしたりしません。まるで自分のために書かれたのではないか、とさえ思えるような本にも何冊か出会いました。誰にも教えたくない、私だけの



資料収集の場としての図書館

保育科　准教授　鈴木　慎一朗

私にとって図書館とは、資料収集のために活用することが多い場所です。大学院時代、歴史研究をしていた私は、よく大学の附属図書館へ足を運びました。お目当ての資料があるときはもちろんのこと、それ以外でもよく利用しました。研究に行き詰ったとき、なにげなく薄暗い書庫に入り、色々と探っていますと、思いがけない資料に出会うこともしばしばありました。私の大学院時代の研究テーマは、「師範学校における音楽教育実践」でしたので、古い師範学校の教科書等を見つけたときには、お宝を発見したような気分になり、その日は浮かれて幸せな気分に浸っていました。

さて、白梅学園短期大学に就職してからも、図書館をよく利用しています。国会図書館や他大学に置いてある資料をコピーしてもらう文献複写の制度を活用しています（いつも丁寧に手続きをしてくださる図書館の職員の皆様に感謝しております）。その他、大学院時代の癖が抜けきらず、少し時間がありますと、ふらっと図書館の中に入って、なにげなく色々な文献を手にすることがあります。私の研究室の隣の階段を下ると、すぐに図書館にたどり着けるというのも魅力です。音楽関係の文献も比較的豊富で、授業の準備や論文執筆の際には有効に活用しています。

白梅学園の図書館での一番のお宝は、『音楽教育法研究　音楽教育法研究集会報告書』（1953）です。途中、ページが欠けている箇所もありますけれども、敗戦後の1952（昭和27）年に東京芸術大学において開催された「音楽科指導者講習会」の内容を知ることができる貴重な資料です。教員養成機関が、師範学校から新制大学教育学部（または学芸学部）へ移行する中で、初等教員養成、中等音楽教員養成における音楽教育の指針が示されています。ちなみに、現在の保育者・教員養成機関でもしばしばテキストとして使用されている『バイエルピアノ教則本』や『コールユーブンゲン』は、かつて師範学校用の文部省検定済教科書として位置付けられていました。1952年の「音楽科指導者講習会」においても『バイエルピアノ教則本』や『コールユーブンゲン』の書名が挙がり、学生たちに求める音楽技能の基準として示されています。このように、戦前から戦後のイデオロギー転換により、扱われなくなった歌曲、楽曲がある一方で、戦前から連続的に継承されている教材もあります。

話は変わりますが、現在、音楽関係の教室の大部分は、Ｉ棟の地階にあり、防音で空調も完備されています。Ｉ棟が建設される前には、池があり、その周辺にピアノ室があったそうです。その当時のピアノ室で使用されていた年代物の置き傘を金子先生が発見され、見せてくださいました。その他にも、金子先生から、貴重な音楽関係の文献を数冊、いただきました。

このように白梅学園に就職してからも、おかげさまで、時折、貴重な資料に出会い、刺激を受けながら生活しています。

ものにしたい…本はそんなトキメキや秘密を、空想や夢を、過去や未来をはらんでいる訳です。何よりあの本の重みと紙のにおいや手触りには何とも言えない心地良さがあるのです。ちょっとマニアックでせうか…。そのため、私は実物の本でないと満足できません。いわゆるケータイ小説にはノンタッチ。本の良さのない小説なんて興味も湧かないし、何よりナンセンス！だと思いますから。

こうして本に激しく依存しながら生きている私は、人付き合いが大変苦手なのでございます。でも、誰かと関わりを持つことを助けてくれたのも、やっぱり本なのであります。別に「人付き合いとは」みたいなノウハウ本を読んだ訳ではなく、お互いに読んだことのある本や好きな作家についてお喋りすることをきっかけに仲良くなっていくのです。好きな本のジャンルや作家が似ていると、なぜか気が合うんですよね…不思議。

でも白梅に来てからは、本について語ることがほとんど無くなってしまいました。皆さん、もっと本読みましょうよ。ある意味魔力でもある本の魅力を知る私としては、せっかく時間的余裕のある大学生活を、だらだらと流されて過ごすなんてもったいない！そうなる前に本に触れておきましょ。そしてあわよくば私と語りましょ（笑）。読書会やらブックトークやらを図書館でやらないかなー、と期待をよせる今日このごろです。

本の学びとキャンプ

子ども学科３年　梅田　幸恵

去年の春から、私はキャンプのボランティアに参加するようになった。キャンプのボランティアは、実際に行くだけでなく、行く前に子どもの遊びやお土産作り、食事や読み聞かせなどの企画を行う。その遊びなどを調べることがきっかけとなり、白梅学園の図書館を利用するようになった。

私はキャンプ活動を通して、経験だけでなく学ぶことの大切さを実感した。そして、子どもが自然の中で何を感じ、何を学んでいるのかを知る必要があると考えるようになった。なぜなら、子どもの経験の幅を狭めてしまう行動を、自分が無知のためにとってしまう恐れがあるからである。これは、私が身をもって経験したことである。また、学ばなければ子ども中心ではなく、大人中心になってしまう恐れもあるのではないだろうか。逆に学ぶことによって、子どもに幅のある体験を提供することが、少なくとも学ばないよりは出来るのではないだろうか。

この実体験から、子どもと自然との関わりに関心を持ったこともあり、白梅学園の図書館で本を調べることにした。白梅学園の図書館には、子どもに関する本が数多くあるため、私の学びに適していた。そして本を読んでいくうちに、より興味が湧き、学びを深めることができた。今年はこの学んだことを活かし、キャンプ活動に挑戦していきたいと思っている。

この１年間というもの、キャンプと学びを繰り返している中で、本から学び、子どもと関わり、また本から学ぶことに戻っていくこと、この繰り返しが大切であることを学んできた。この学びが私を成長させ、将来の夢への一歩となるのではないかと思っている。

私にとって本とは、今まで述べてきたように経験から学んだことを深めるものである。それだけでなく、どんな時でも励ましてくれる『心の友』であり、本は時を越えた故人からも学ぶことも出来るものではないだろうか。

かつての文豪、フランスのユゴーは「あらゆる苦悩をだきしめることから信念がほとばしりでる」と綴っている。苦悩から逃げようとするのではなく、苦悩を正面からからだきしめること。挑戦していくことの大切さを教えてくれている。

私はこれからも本を読み続け、本からの学びを活かし、様々なことに挑戦していきたい。

●●●図書・文庫貸出ベスト 10 ●●●
（2009／1／1～2009／12／31）

順位	回数	書名
1位	42回	はらぺこあおむし
2位	26回	わたしのワンピース
3位	18回	おおきなかぶ
4位	14回	100万回生きたねこ
5位	13回	どうぞのいす
5位	13回	たのしくおどろうDVDつき手あそびうた
7位	11回	はじめまして　たんぽぽえほんシリーズ
8位	10回	赤ちゃんのためのことばの絵本
8位	10回	くれよんのくろくん
8位	10回	スイミー　ちいさなかしこいさかなのはなし
8位	10回	ぐりとぐらのえんそく
8位	10回	手あそび百科
8位	10回	いつか愛を知る日のために

今年は施設実習の課題図書ではなく絵本が上位を占めています。

ランク外になりますが、昨年2月にアカデミー短編映画賞を受賞した「つみきのいえ」の書き下ろし絵本が人気急上昇となりました。

●●●ビデオ・DVD 閲覧ベスト 10 ●●●
（2009／1／1～2009／12／31）

順位	回数	書名
1位	80回	崖の上のポニョ
2位	63回	モンスターズ・インク
3位	50回	恋空
4位	48回	ハウルの動く城
4位	48回	着信アリ２
6位	47回	耳をすませば
7位	42回	美女と野獣
8位	40回	着信アリ Final
9位	36回	着信アリ
10位	34回	誰も知らない

「崖の上のポニョ」が圧倒的な利用回数で1位となりました。

また、ネグレクトを題材にした「誰も知らない」は9月から利用可能の新着資料ですが10位にランクインしています。